



醒。老人積年所著小說九百不讓
虞初。世態情竇多而不通。釋史野
乘無所不窺。若夫椎輪大輅。質不勝
文。名物混淆。能哉不能。老人者感於
此。卷伍今昨。指搯誣偽。著為一書。名
骨董集。鄉儒先生或嘲之云。此瑣



者。何足以辨矣。吁。大舜好察迩言。孔聖
數誦童謠。吾子知齊東野語。班氏稱街
談巷議。後世如田叔。禾季。卷叢談。胡元
瑞。莊嶽。季譚。皆是物也。骨董。非何
氏。樓下物也。必矣。比彼不知而作之者。
移的就箭。掩耳盜鈴。則六有逞庭矣。

余與老人。曰一癖。不得不為之一解
嘲也。文化癸酉冬日。杏園主人書于
緬帷之林下。



骨董集上編前快目錄

上之卷

- 好事之心得 [一]
- 竹馬 [三]
- 蝙蝠羽織 [五]
- 舊吉原雨日のうほ [七]
- 臭を呼て斗ニとりの [九]
- 豆腐紅葉 [十一]
- 銭湯風呂呂始 [十三]
- 行水船居風呂船 [十五]
- 伊勢風呂吹 [十七]
- 目黒餅花 [十九]

- 昔威儀 [附・紺屋之] [二]
- 昔人之質朴 [四]
- 曹人形 [六]
- 髭男 [八]
- 粉之肴板 [十]
- ころばどとの下踏 [十二]
- 風呂撞鼻禪 [十四]
- 石榴風呂・鏡磨 [十六]
- 金龍山采饅頭 [十八]
- 耳垢取 [二十]

- 臍脂繪賣 [廿一]
- かぶことりの言 [廿三]
- 浮世袋 [廿五]
- 燈籠踊 [廿七]

中之卷

- 名古屋帯 [一]
- めばすき・かむべ [三]
- 行燈 [五]
- 女之編笠・塗笠 [七]
- 浮世袋再考 [九]
- 大津繪佛像 [十一]
- 重箱・硯蓋 [十三]

- 釜煎猫之蚤取 [廿二]
- 駒形之螢 [廿四]
- 初雪之句 [廿六]
- 火燧 [附・地火燧] [廿八]
- 挑燈 [四]
- 笠の下布を垂 [六]
- 桔梗笠 [八]
- 奥板古製 [十]
- 浅葱椀 [十二]
- 二足三文 [十四]

- 三線鼓弓古製 十五
- 丸づくしの文様 十七
- 祖父祖母之物語 十九
- 打出小槌 廿一
- 奈良庭竈 廿三
- 宗祇之蚊屋 廿五

- 紫華足袋 十六
- 題目踊時繪香合 十八
- 持游無木 二十
- ちまご馬きり王牛 廿三
- 長崎柱箭并幸木 廿四

前目録終

骨董ノ系上編上之巻

江戸

醒・輯



○好事の心得 一

日本永代藏

刻梓の年号ありてはともども云む 連歌師の宗祇法師の此所泉列場を

まじく歌道のそやりに時やうづら本茶室よとける人ありてありの句あり
 時胡椒をいひふもる人あり坐中ふんちゆうとてりりをして一両りけて二丈うけとて
 ちがふ一をを思案して付けるをさうとてやとてたらうとと宗祇殊外そしきとよあめあ
 とありえ」とありありか小風雅を好む此志ありて家産を破る基もととらんあり
 を疎あそびよとて風雅を好むいひのべうとげられ人のありたる話あり宗祇の
 あめられとてるがめらとて且つらぶのらうえまもとめたりと

○昔の威儀附 紺屋の白袴 二

昔のちづの男女も威儀をほくらをのらうとて威儀をうらうとらふた

十をほひを正ちりする事あり **七十一番職人尺歌合** 文安宝徳の時代 の繪小とて通人

高人より小素襖を着女に頭を布めて巻まの衣をとりて其又のほが折る

著るる体をさるりするを考へ知べし能の狂言の室町殿の御代其時心のぞと

あつた母のたみを作りのぞとあるいと古老の説あれ其出立も當時の風体

あるべしこれり女よひでたつよ白た布めて頭をほみ両のちと右左に結たれて

これをせぬがうしこし入掛衣をほぼ折て著るるも **職人尺の繪** ようあしひ

今よりあつた四百年ほど前の民の女の風体の能狂言のりたたらとてあかむひを著る

南留別志 卷之二小云田舎の女の本綿のひとある物を著る上しきものを礼服とて

古の小鞋あどののられるあべし又しら巻をきるを礼儀とて職人尺合あどの繪小も能

の狂言小もあるがごめんたみの女の装束あべしとあり田舎人の老実あもるも小古風

を失つて昔の威儀のりあつたのりつら残つたり **紺屋の白袴** としり **誇** 今もしりつら

うた 誇り **山乃井** 慶永元 **卷之田** **うた** 雪や紺やれた白袴 **と** しり **あり** **崑山集**

慶永四年撰 明暦二年刻 中も此句を以て貞徳の句とあれはあつたり案小當時の紺屋に常は

袴をきつるもあつた小此誇もあつたり今も世盲人猿よあつたりあつた袴をきると

控女の常小打掛を着るあつた往古の威儀のあつたりあつた

○竹馬 **三**
唐山の竹馬の戯の後漢の時とぞあつたわつた
御國の古代の竹馬を
唐山の竹馬との異あり葉のはれたる生竹に縄を結びて手綱とてられ小やうに
かりとるるを竹馬の戯としり竹馬の友としり則是ありたは摸りあつた
古ををるるべし今の世のどろ弱の頭の形よほりまたる物よあつた **袋草紙**
難読の糸よ云壬生忠見幼童之時内裏より有る召無乗物とて難参之由と
申然ハ竹馬小あつて可参之由有御定仍進此歌
竹馬ハあつたがち小しつとよとよ今夕あつた小のりてあつたらん
夫木抄
竹馬を杖やも今れたのむらりつらハ控びを母ひひとほ

新撰六帖 五

竹馬小あはれありあれ

九條三位入道知家

右の古歌を考ふるや或いはあはれありあはれありとあり或いは杖ともたのむといひ或いは

あれといひのよきとてたよのらりと古畠の生竹小乗たりあやふよくあはれあり異制

庭訓 遊戯の事をあはれいりる条より竹馬馳とりありたよのらりと古

畠の如く生竹を馬うけて馳らるる事より異制庭訓の虎関和尚の作あれば

あはれとあり下学集 騎竹之年 指河崎之童子 竹馬之年也 となり騎竹といふも竹

騎戯るの謂あるべし

昔人の質朴 四

一代女 貞享三 一之巻小云此四十年跡まごの女子十八九も竹馬に乗て門

小遊び男の子もさぶらうて廿五よくえ服せし小あはれもせしきく変る世や云々

按るより四十年跡といふは正保の世のあはれ正保の今文化十年よりあはれを百六十七年
むと前より當時の質朴もて小懸くららるゆゑあはれ幼きあはれとあり今十八九の
女子もあはれをさぶらうて廿五よくえ服せし小あはれもせしきく変る世や云々
竹馬の
竹鉄

古代竹馬圖

此畠の元禄十三年の印本
田光大師傳のうらより
摹出せられた正和年中の
古画を摹して刻したる
よあれい因まゝのそと
正和年中の今文化十年より
あはれ五百余年の
とあり昔ありあはれを
あはれ



五百年の
昔の竹馬
遊の情
今と
あはれ

狂畫苑 安永四年印本 小百鬼夜行の古画を

縮小して其のうちに此畫の戲画

あれども當時の竹馬の姿をみる使

て一好古小録に本朝畫史を合考する

百鬼夜行の明德の比の古画あり明德の

今より文化十年よりかゝる四百二十餘年の

昔より物の頭の形はさく竹馬の



百鬼夜行の古畫の怪物
あれ竹馬の足をうけた
唯そのあちぢい
さのり

唐山の古銅器小童児竹馬を侍らる形を

鑄たるあり銅色宋時代の物といひ鑑定

のこゝその臨本を得く竹馬のこゝを

宜和年間之物と

本朝

鳥羽院の保女の

比よめといひ保女

より今文化十年よ

りりてかゝる六百

九十餘年ありなをみるべ

見五歳なりて檣車の

樂あり七歳ありて

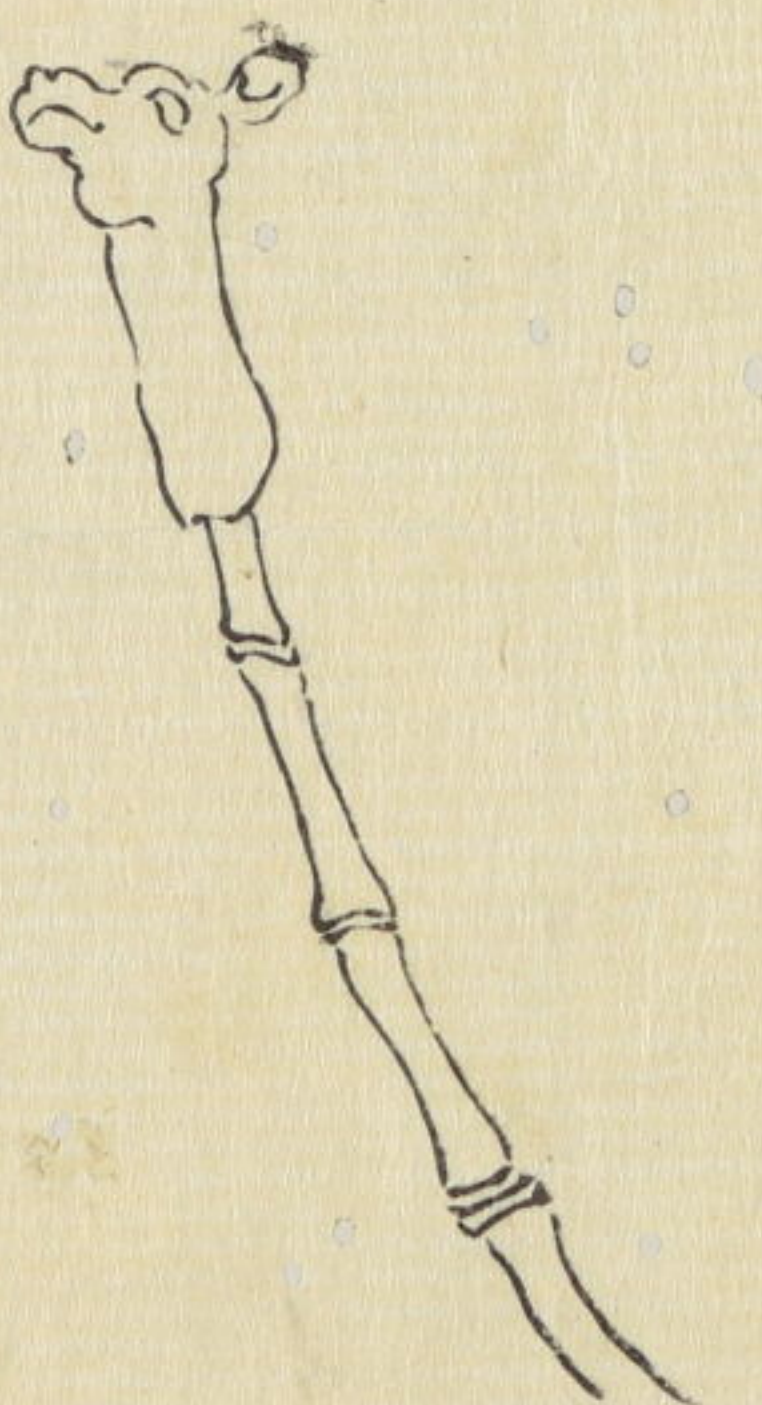
竹馬の歡ありて檣車小

對してこれい唐山の此畫の如く竹馬あらん

彼曼を参り考る小生竹を馬よとるハ

日本様あらん駒の頭よつくるハ唐様あらん

中昔よりさのり竹馬の



此繪筆者、詳なりとす
心も画風を以て時代を
考へ、實永正保の比の
古画をわらん其時代の
繪、今とてちるがれ
かわけ、たかよぐり



五 杏花園養 蝙蝠羽織圖



歌舞園實

此繪の文様、田字草之
本草綱目の横切
り、今と花の

慶安三年の印本
志之双紙 上文巻み、た物の目
る糸、袖の
蝙蝠羽織、
當時の編織
實永正保の繪と決む、
今文化十年より
おそむ、七十
年、前の

曹人形 六

増鏡 うちの雪の条に五月五日不^しり御^みおのの花と玉と色^{いろ}く^くお^おく^くすのぬれと云^いく^くとのり^りぬ^ぬる^るの八十八代 後深草院位^{ごふかそうゐんゐ}に^につ^つを^をあ^あひ^ひい^いと^とも

あ^あく^くぬ^ぬく^くす^すの^のま^まの^の建^た長^{ちやう}三^{さん}年^{ねん}辛^{しん}亥^{がい}五^ご月^{げつ}五^ご日^{にち}の^の事^{こと}あり^{あり} 内^{うち}取^と叢^{そう}書^{しょ}小^{せう}載^{ざい}る^る某^{その}の^の隨^{ずい}筆^{ひつ}に^に

右^{みぎ}の^の増^ま鏡^{かみ}の^の文^{ぶん}を^を引^ひて^て云^い曹^{そう}花^{はな}の^の紙^しを^をり^りて^て曹^{そう}を^をほ^ほく^く其^{その}上^{うへ}に^にさ^さめ^めぐ^ぐの^の花^{はな}を^をぬ^ぬり^りて^て

あ^あの^の紙^しを^をり^りて^て人^{ひと}形^{かたち}を^をつ^つり^りと^とも^もあ^あじ^じと^とつ^つら^らぬ^ぬの^のめ^めと^とび^びよ^よと^となり^り今^{いま}の^の端^{たん}子^この^の

曹^{そう}蒲^ふ曹^{そう}の^の此^こ遺^い制^{せい}を^をる^るべ^べと^とい^いり^りか^かの^のれ^れ此^こ説^{せつ}小^{せう}より^{より}あ^あと^とこ^ころ^ろつ^つれ^れて^て 日本^{にっぽん}歳^{さい}時^じ記^き 五^ご年^{ねん}の^のう^うら^らの^の繪^ゑを^をえ^える^る又^{また}曹^{そう}の^の上^{うへ}に^に人^{ひと}形^{かたち}を^をつ^つり^りと^とも^もあ^あじ^じと^とつ^つら^らぬ^ぬ

人^{ひと}形^{かたち}と^と別^{べつ}の^の物^{もの}小^{せう}あり^りて^て人^{ひと}形^{かたち}を^をり^りて^て曹^{そう}人^{ひと}形^{かたち}と^とい^いひ^ひ畧^{りやく}と^と曹^{そう}と^とい^いひ^ひたり^りある^る

べ^べ然^{しか}則^{すなは}右^{みぎ}の^の隨^{ずい}筆^{ひつ}小^{せう}曹^{そう}の^の花^{はな}の^の曹^{そう}の^のう^うら^ら紙^しを^をり^りて^て人^{ひと}形^{かたち}を^をつ^つり^りと^とも^もあ^あじ^じと^とつ^つら^らぬ^ぬ

説^{せつ}小^{せう}よ^よ合^あ曹^{そう}人^{ひと}形^{かたち}の^の曹^{そう}の^の花^{はな}の^の遺^い制^{せい}を^をる^ると^と疑^ぎあ^あら^らん^ん曹^{そう}人^{ひと}形^{かたち}と^とい^いひ^ひの^の義^ぎも^もこ^これ^れよ^よ

の^のた^たら^らう^うあり^りた^た小^{せう}摸^もし^しあ^あら^らう^うと^と番^{ばん}を^をえ^えて^て考^{かう}へ^へべ^べ 日本^{にっぽん}歳^{さい}時^じ記^き 卷^{まき}之^の四^よ端^{たん}子^この^の

曹^{そう}蒲^ふ曹^{そう}太^{たい}刀^{とう}の^の事^{こと}を^をり^りて^て糸^{いと}に^に此^こ事^{こと}む^むり^りの^の厚^{あつ}紙^しに^に人^{ひと}形^{かたち}を^をり^りて^て薄^{うす}紙^しを^をり^りて^て曹^{そう}の^の

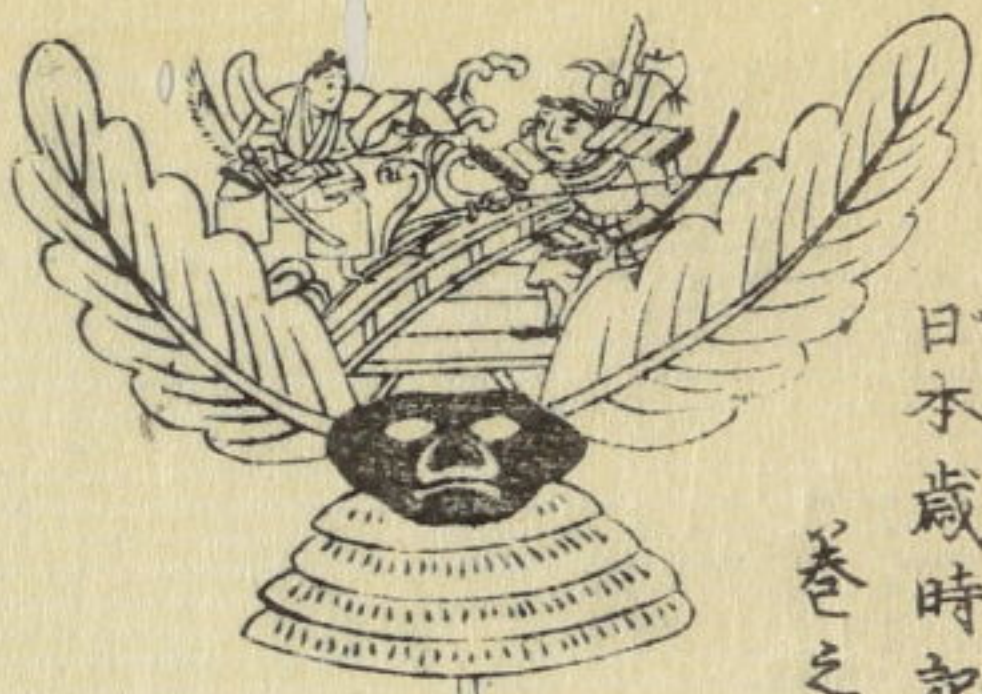
形^{かたち}小^{せう}ら^ら或^{ある}ハ^ハ菰^{こも}の^の葉^はを^をて^て馬^{うま}を^を作^{つく}り^り或^{ある}ハ^ハ木^きを^を長^{なが}刀^{とう}の^のさ^さら^ら小^{せう}び^びづ^づり^りあ^あじ^じと^とい^いて^て戸^と

外^{ぐわい}小^{せう}立^た侍^じり^りが^が近^{きん}事^じの^の風^{ふう}俗^{じやく}美^み巧^{かう}を^をり^りて^て木^きを^をり^りて^て人^{ひと}馬^ばの^の形^{かたち}を^をり^りて^て曹^{そう}の^の形^{かたち}を^をり^りて^て

ら^らり^りと^とい^いひ^ひ昔^{むかし}の^の曹^{そう}人^{ひと}形^{かたち}の^の質^{しつ}素^その^のさ^さめ^めあ^あら^らん^んべ^べ一^{いつ}貞^{てい}享^{かう}の^の時^{とき}昔^{むかし}と^とい^いひ^ひを^をり^りて^て

ら^らの^の比^ひを^をり^りて^てゆ^ゆ 〇 園^{えん}太^{たい}曆^{りやく} 文^{ぶん}和^わ四^し年^{ねん}五^ご月^{げつ}五^ご日^{にち}の^の条^{じょう}小^{せう}曹^{そう}蒲^ふ曹^{そう}太^{たい}刀^{とう}の^の事^{こと}を^をり^りて^て糸^{いと}に^に此^こ事^{こと}む^むり^りの^の厚^{あつ}紙^しに^に人^{ひと}形^{かたち}を^をり^りて^て薄^{うす}紙^しを^をり^りて^て曹^{そう}の^の形^{かたち}を^をり^りて^て

右の書は此節の如く
人形を



わつぎ紙よ
わりのねん
藤桐よつらた
りゆとど

曹人形圖
二種



人形舟

此畫は延宝天和の
時代の繪のうらよ
のり草画にて
微細ありとて
考證のひとらよ
模しゆとせり

○舊吉原の両中のさる 七

万治二年印本

私可多曲

香花園

小云むりり

江戸のうられぬ花屋とりの所

此也中畧 此処乃遊君は兩ある時のみ道歩きよろく移るゝとて小云むりり
奴のせある小負ておたりあつとゆいと奥あればとせりまにや宿の門小入ぬれが
たれやらんよとせり

ほ井筒井づにけりけりろく移繩負にち近みおもえたるまに

わとよとりのりの肩がまよとせりるに全盛らうとせりる子あればたれとせり小のよ
つたて遊女と

くららうとせりけりけりこの肩がほり君あらどとたれりあぐべき

とあんちみいと也 異本洞房語園 享保五
年ノ記小云元和年中元より原の比西のあり時の

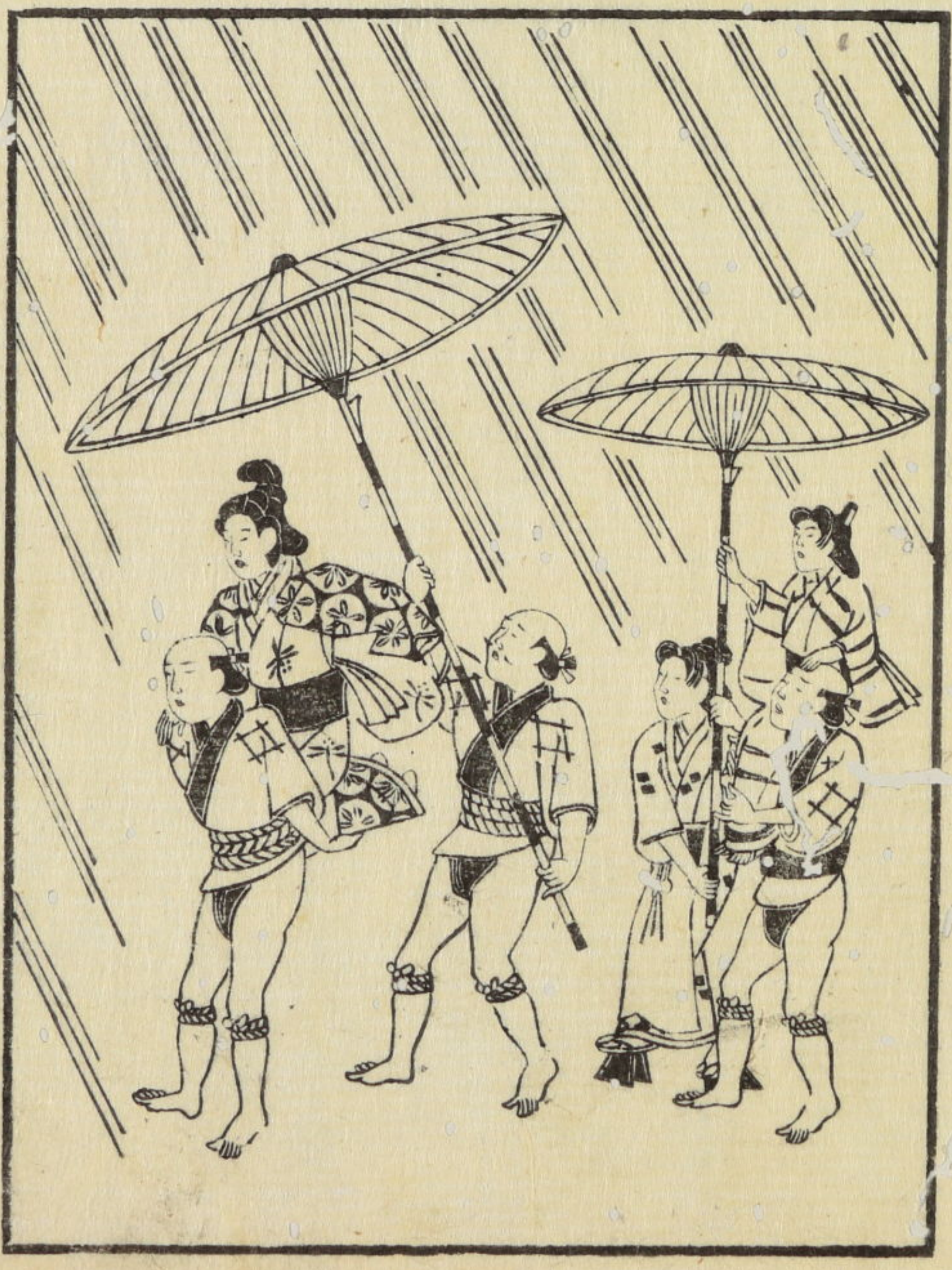
遊女ども揚屋一通り小下男どりの小あつれて行たりかり根ハ六尺ハ繩をりて常
に西のものをうろくしてそのの遊女あるた小袖とて足をほりみりてを長くたせて

西の膝を六尺の手のうしろのせて臂をとり衣紋ふつろひて後より長柄の傘を巨
 かけさせたる辨あり品よく見えしとあり其古番を摸してたふあらはせし。貞享
 元年板 **三代男** 詞花堂 藏本 一之巻小江戸三聖の薄雲が揚屋入のさゆを回したる
 条よ云 **紫立ち** 曙のうらむもさゆのおむらひふりんつきの傘角助がさう掛
 肩で風まらしてらら〜ゆる粧の玉兩枝ある白梅落と詩人あどる詠むは河
 角助が背中小乗うつりありありさゆの如末よりさふおれおん身よりの光る
 云とあれは吉原今の地小うつりて後も負とて揚屋入ある事あり〜歎
 ○因よ云元龜の比の高祿の武士の妻女も乗物小乗事あり嫁入の時も麻の
 かつきを著て負木といひの尻くけう〜うさゆ小負とてゆたけるよ
 古老の説を當時の質素の風のそびゆるよも残るたるるるべ
 ○元吉原今の地小うつりて明暦三年あり **私可多咄** 万治二年の板よ
 元吉原の時をまことりづる二年あれば證とせり小たれり

右小の **私可多咄** とりの
 草紙のうちに此繪あり
 是則元和年中
 今の大門通一吉原の
 ありし時のさゆさ
 今文化十一年よりりて
 ちよと二百五十近き
 指あり○あり袖の
 ちよとさゆさゆる六尺袖
 あり衣服のゆたつと
 みとり○下男のさゆ
 茶髪髪あり昔
 質素の風料えるるべ
 ○右よりさゆる **三代男** の
 ちよとさゆのさゆ番
 のれいさゆさゆたれれば
 摸〜さゆさ

奥書あり

万治貳年季秋吉日



○髷男

〔十〕

見聞軍抄

慶長十九
年印本

昔関東より髷男をばあめとして髷男といひて

むむゆゑに諸侍髷を願ひあつてはるる髷をば鍾馗髷とて諸人好む鬼髷を

在りしれり古記よめ此髷の事ありあはれはるる髷をば天神髷とて武家

よりこのと好むたゆりて云々」あつてはるる詞のよふ當時の風体よりべし古画をみる小

髷もき男子のすれあり昔の髷うたは者い假髷をさへあつてはるるをさける西鶴大鑑

もも髷男のらとこえたり

○魚を呼んで斗くとりし

〔九〕

饅頭屋節用集よ云、和国兒女呼魚曰斗云。類一説云、南朝一人

呼食為頭呼魚為斗也」と云ふゆゆれは魚類をさとりしゆありき類

みと泉の塚の魚屋よ斗と屋といふ家守ありも此ゆゑなりん

石節用集ハ林逸の作る、辨疑書目録、極字各目の部、節用集貞書本二四、文龜本とあり、其後慶長三年の印、本あり、そのを知らべ、倭訓類聚、兒女の詩、魚をさとりし、艾草類説、南朝呼魚為斗、をさとりし、類聚、類聚也、とあり、

○粉の看板

〔十〕

あつての事、和名抄、粉、和名之路、妓毛能、とあり、長明四葉物語、小春のききた

まじにかかえて云々空のけしはとて、まじりてとあつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、

あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、

あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、

あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、

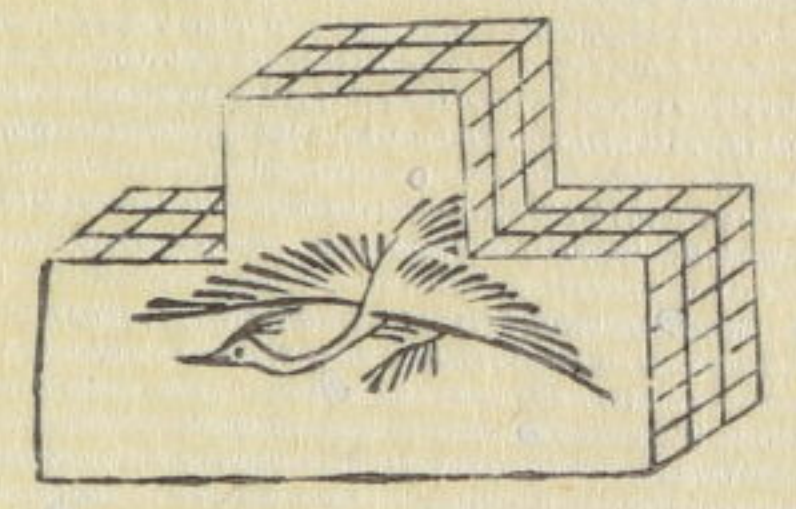
あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、あつてのゆゑ、

白粉師看板

元禄三年板

人倫訓蒙書

粟よんえん



○豆腐の紅葉 十一

蝦鑑 天和三 下之巻 紅葉豆腐の事何國も豆腐のめれども別て當津
のを勝たりと古人より云傳は紅葉と云名を加たるその蝦の櫻鯛もふくらぬ
味あれはとせわしむるも花の對する紅葉の縁あるべし又或人の云此豆腐を人
のゆふちうと祝て付たる名ともゆりの買様と紅葉と音便成ゆ致今豆腐
の上は紅葉を印を詞に就て形を顯るべし買用も通てしゆはま今豆
腐は紅葉の形を印する事蝦の紅葉豆腐は始まるあり紅葉を買様は
取のよ幼氣あれど昔此類おやせられいし色る名註よととる人のよれを
りて祝とよするあり

○岡小云百老の説は南天といふ木の本名南天燭あり手水鉢の下は植食物
のふりたるをどにせり諸毒を解するおあり鏡の下は敷又ハ裏小鑄付あり
その南天を難轉小取ありて難を轉とといふ意よとする禁厭ありといひ

紅葉を買様小取ありとも此たひひるる能の狂言鱸庵丁といひ
深草の土器よりんらんぐりのわいれをよるといふ事の前よりい
ごご能の狂言の古たごあり

○ころもどといふ下踏 十二

文禄より寛永のわいごの古画をよるよりひきた瓢箪を火打袋或ハ印籠巾
著の根付と又一ハ瓢箪をくりをもおびたる鉢をあらりまげけし傳て瓢箪を
おぼるの轉ざる禁厭ありとこれよりてありは江戸の名物よころもどといふ下踏
あり其下踏は瓢箪の形を印するも原彼禁厭のおよする事あるありころもどと
いふ名をあらせあるよやとありたるは母のれが推當言あれどよとありひよりあふ
たうよりま出

○江戸銭湯風呂の始 十三

寛永十八年印本 ところろ物誌 蔵本 古花園 よ云「る」は江戸らんをうのころも天

十九卯年の夏あきの比くらりとも平勢せいと市いちといひの錢ぜに籠かご櫓がらのありとせんたう
風呂ふろを一ついちある風呂ふろ銭ぜにの永なが樂らく一いち後ごあり皆みな人ひとながら一いちた物もの哉やと入い浴よくひぬさま
とも其その比くらの風呂ふろあうんと人のあま〜有あり〜わらわの湯ゆの帯おびや息いきがほぼりて
物ものもいれど煙けまて目めもあられぬぞ〜風かぜ呂ろの口くちもあ〜りぬ風かぜ呂ろをらみ〜今いまの所ところ
毎まい日ひ風呂ふろありび〜十五ご後ご女に後ごづ〜ま〜入い也や〜

○風呂積鼻禪 十四

たよめららど寛永正保の比くらの錢ぜに湯ゆ風呂ふろの古こ番ばんを〜横よこ鼻び禪ぜんを〜びたるま風かぜ
呂ろ入いる体ていを〜きり〜画ゑ工いの心こころを用もちたる繪ゑ〜ら〜と疑うたがひ〜あ〜ら〜ど
昔むかしの民たみ家の年としれた者ものも風呂ふろ入いる事ことを〜さ〜ら〜と〜
二代男天和二年 三代男貞享
等とらのうら〜の錢ぜに湯ゆ風呂ふろの番ばんを〜さ〜ら〜と〜
御前独狂言宝永二年 一之巻
蒙もう大門もん屋敷やしき 宝永二年印本 一之巻
或ある人ひと酒さけに酔よ風かぜ呂ろ積せき鼻び禪ぜんを〜た〜風かぜ呂ろ入いる事ことを〜ら〜と〜

られ宝永の比くらをも風かぜ呂ろあ〜ら〜と〜り〜のありて常とこのあ〜ら〜と〜び〜り〜と風かぜ呂ろあ〜ら〜と
あ〜ら〜と〜
行ま水みづ船ふねとりのありのを仕始あきらめて利りを得えたる事ことを〜ら〜と〜

○行水船居風呂船 十五

日本永代共にほんえいたいとも 到粹の年号は〜と〜 四之巻 江戸の事 義理櫻 利板の年号は画用
は〜ら〜と〜
一之巻いちのまきと和泉わいづみの場ばの事ことを〜ら〜と〜 六之巻 門の商人の子 たれが身みにたある
事ことを〜と〜夫つま〜ら〜に万まん事じえ〜ら〜けれ〜取とり〜嶋しまも〜た〜小舟こぶねも居い風呂ふろと〜ら〜
なる大船おほいせんのありて漕こありた一人ひとり三さん錢せんの極ごくめたれ〜女に事じゆみ舟宿ふねやどと〜あ〜りて湯ゆ
にら〜ら〜も入いら〜と〜出いで未み合あを喰くい相あ意いの〜り〜入いら〜ら〜と〜母ははの〜ら〜堪かん忍にん〜と船せん中ちゆう
からと西にし仕出しだ〜居い風呂ふろと〜重宝じゆうぼうあれ〜と〜船せん一艘いっそうより五人ごにん十人じゅうにんつ、此こゝ錢せん湯ゆと
入いら〜ら〜の残のこりを〜と〜とあれ〜行ま水みづ船ふね〜ら〜あ〜ひ〜つ〜て居い風呂ふろ船ふねを
〜ら〜居い風呂ふろ船ふねより今いまの湯ゆ船ふねとりのありの〜と〜

寛永正保時代銭湯風呂古圖

當時ハ男女とも髪付油を用る者

此れ之美軟髪を髪をけし

布の巾を用ひて髪を洗ふ

風呂ノ入ル毎日髪を洗ふ

寸者者ノ髪を洗ふ

五味子ノ子ノ味ノ也

半入獨吟集

建宝五年

前ノ名ノ字ノ也

風呂ノ煙ノもも霧ノをもかかせ

打打露露もも洗洗髪髪

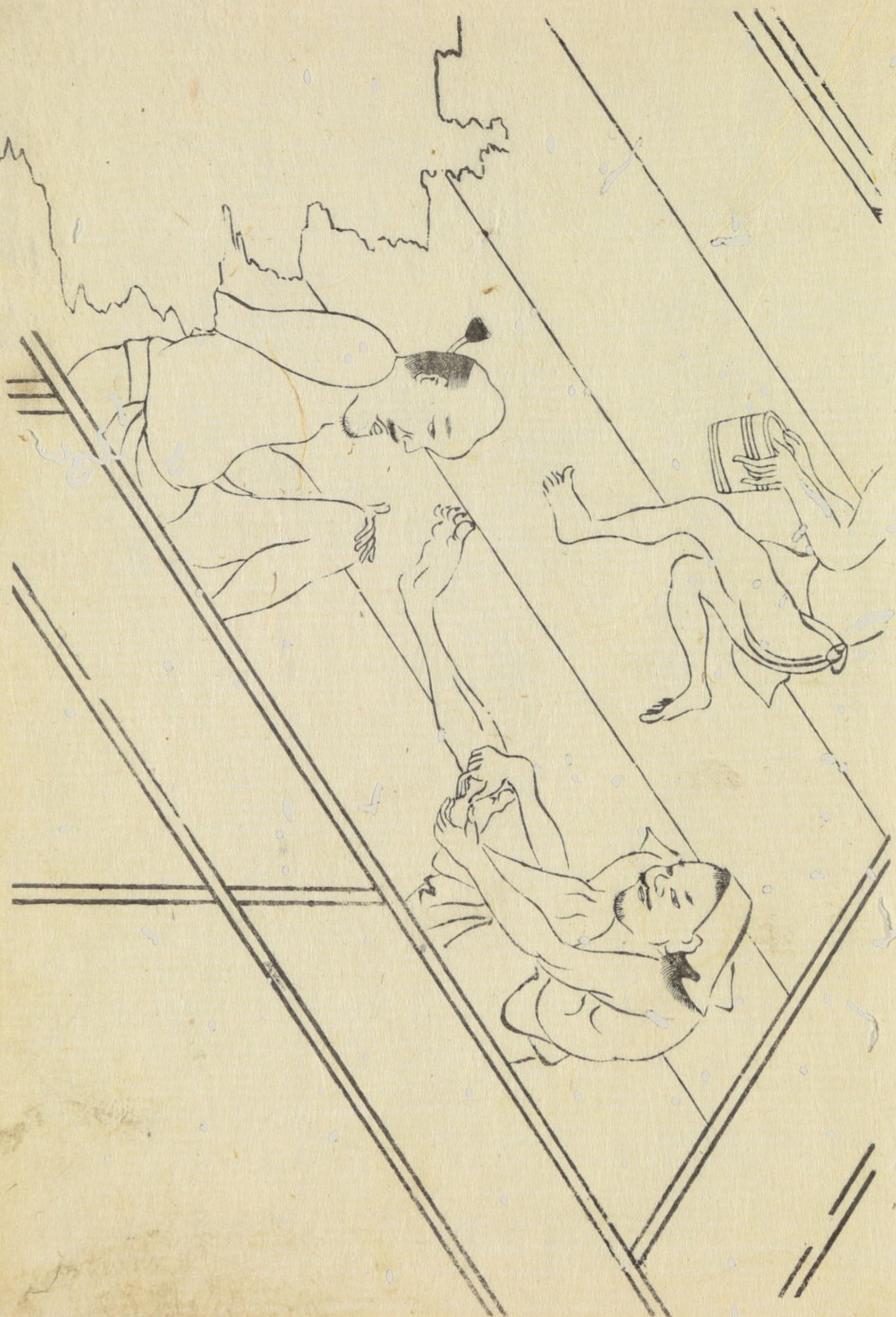
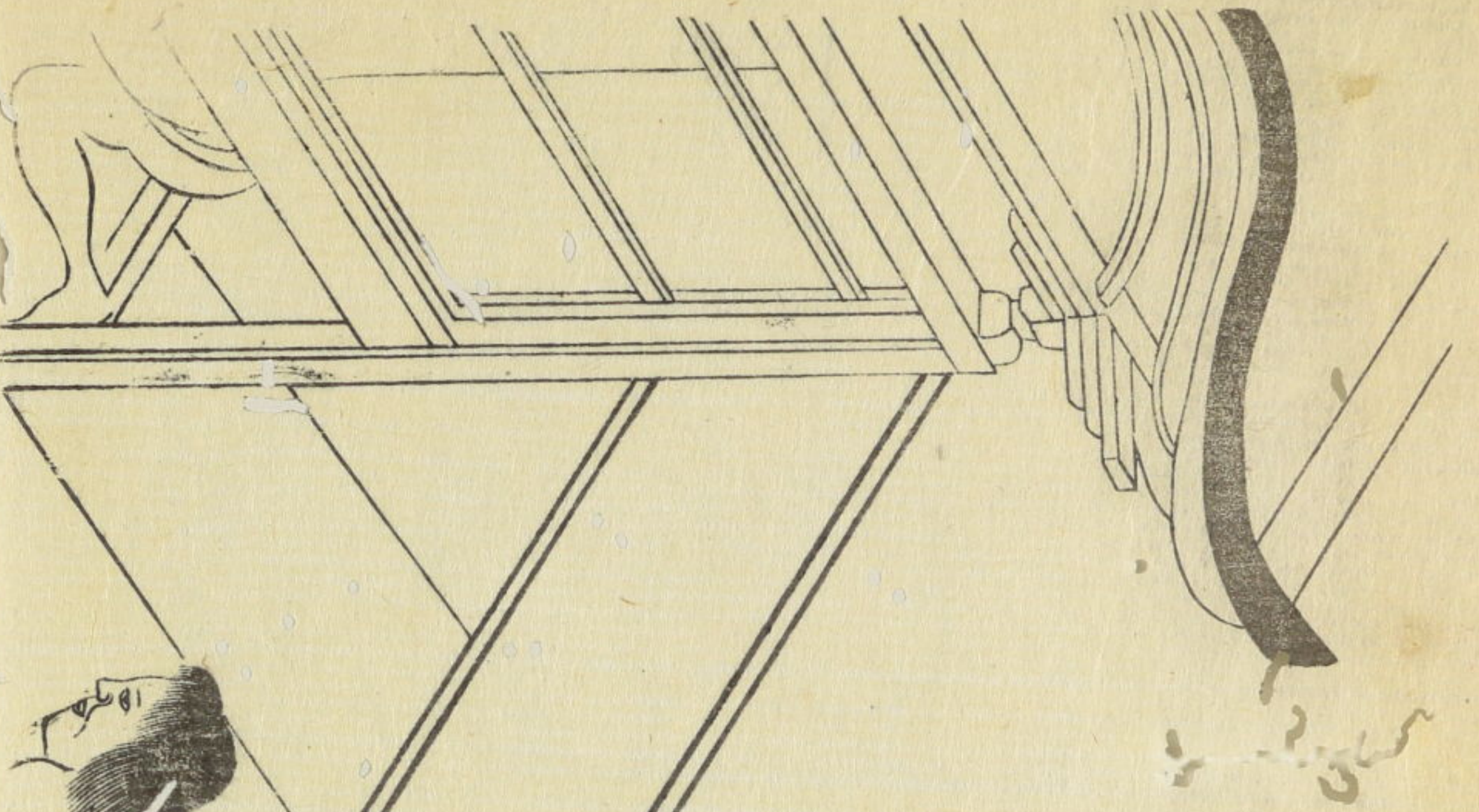
これも一證也

寛永正保ノ今ノ也

文化十年

おと七百七十年

昔ノ也



其二

當時の常より
煙をたぐまふ
たゆむ遊行の
折いたぐまふ
事あれども
あつらへ懐中せど
奴僕よりせたるのみ
夫れと長し
まをの頭雁の首
似るもあふ
雁首の名目残さず
火四つと大さ
一代男



此番の七の儀湯風呂よのてぬる終る
あらの髪あり

奴僕の名目
髪めさゆ
今と異なり

此奴僕の名目
いこの風呂敷あり
當時の風呂敷
敷物あり
物を
料を
ありて
風呂敷の
名目
残さず

此婦人の髪
いと異なり

きざつとあふ
髪あり
○古老云寛永の此の
婦人の帯の廣さ
三つより鯨尺の二寸ほど
紙をむくと綿もど
りごととあ
○古老又云昔の
婦人の髪あわく
長たをたけよ
ゆまらあといひ
やめたり
此番よ
うわつり



○男女ともすれら巻きて
あつらへ

○婦人の
髪のかがり
大異なり
あふ

① 石榴風呂 附 鏡磨 十六

醒睡笑 元和九年作 万治元年板 二之巻よ云りづまもあまぐとあるをうみやちとぞぶ風呂といひたて
 わあのであはを 柘榴風呂といはんぞいやはやあつらふものころあり「醒」云わくしんらん
 度詞あり 屈入といひを鏡鑄といひよりありたるあり 昔の鏡を磨よ石榴の實の
 醋を用たるゆゑあり 今の癖の醋をとりらぬ

七十一番職人尽歌合 切みとだの月の歌よ

水うひやごころのさむにむげもよやあつらふものころあり 月のありて
 繪も鏡磨のめらつらよ 石榴をぬれたる所をけり 此歌合の文安宝徳のあはれ
 つまづみとだの月の歌よ

序武独吟千句 天文九年吟慶安五年刻

附の 志やいそありけりいのちありあり

わんば天文の比も石榴を用たるべし 是等をいそ案よ 今江戸の炭湯よ石榴といひ

名目あり石榴風呂のあらありあべし 然則 石榴口の石榴風呂より出たる名目
 ありとぞろ風呂の鏡磨より出たる名目ありあはれととも参考しとく
 ちるとぞ母りし

七十一番職人尽

鏡磨圖

文安宝徳ハ今文化
 十年よりあつらふと三百
 六十余年の昔あり



○ 伊勢の風呂吹 十七

甲陽軍鑑 卷之九下 天文十四年の条よ云「風呂のづれの團もゆへども伊勢風呂と
 中子細ハ伊勢の團元とぞ 焚風呂を好て能吹やとらふの付て上中下とも熱
 風呂をさく在郷す也 大方村一ツの風呂一ツはゆへとてまふわらとすとも風呂とく

鏡磨古圖

画風をりて考るるは此繪ハ貞享元禄のころのころ
 多々見たらんといふもさうと云祿三年松人倫訓蒙書
 鏡磨のすいり秋のちやりのりくはあ根を合て
 底の粉をすいり梅酢とてとぐとあれが當時の
 石桶の用ざるべし古画よりとづいてゆゆるまや



蘭奇縮寫

用は三鶴岡職人尽秋合
 秋のちやりのりくはあ根を合て
 底の粉をすいり梅酢とてとぐとあれが當時の
 石桶の用ざるべし古画よりとづいてゆゆるまや



蘭奇縮寫

心をなやめたる風呂よりぬまうと云えしゆりたる風呂よ入つけたる人の熱風呂中の

一両人の催しと風呂入ぬまう」**本朝諸士百家記** 宝永五 卷之三 摺入の男の方より風呂

を立てもとむるをいふる条より「**廣蓋**よりうら風呂敷あき替の巾帯取調上までの吹

のひをゆる条より「**此風呂**入相の比より来り吹くうれと云ふとわがり場は坐して云こ

と云ぬれが宝永の比より風呂を吹くといふとありあるべし伊勢人の物語を吹く風呂を

吹くといふ空風呂よありとありこれを伊勢小風呂といふ垢を搔者風呂よ入者の身

上息を吹くして垢を吹くといふとありあるべし息を吹くけたるおもしろいひ出て垢より落るるまで

口まで拍子をとる息を吹くといふと垢を吹くといふとありあるべし息を吹くけたるおもしろいひ出て垢より落るるまで

いふと垢を吹くといふと垢を吹くといふとありあるべし息を吹くけたるおもしろいひ出て垢より落るるまで

甲陽軍鑑より伊勢風呂といふとありあるべし然則伊勢の風呂吹くたるとありあるべし

の風呂吹くといふも息を吹くといふとありあるべし然則伊勢の風呂吹くたるとありあるべし

の風呂吹くといふも息を吹くといふとありあるべし然則伊勢の風呂吹くたるとありあるべし

骨董上編上十五

あるべし彼是を参考する昔の風呂といふべし内證鑑よりららるるを汲といふとありあるべし

湯のららるるをいひあり○さ大根を熱く蒸して煙の立ちどるるを大根

の風呂吹くといふも息を吹くといふとありあるべし然則伊勢の風呂吹くたるとありあるべし

○金龍山米饅頭 十八

或説より江戸の名物米饅頭の根元は浅草聖天金龍山の麓鶴屋あり慶安の比此

家の娘よあり後と云ふるなり此女始てこれを製さかすいひがまんらうと云ふ此説より

たよ模し知と番のござり延宝の比より辻賣あり米をよみといふ米まんらうと云

も米のまんらうと云義あり女の名よよりよひたるよあわらざるべし常のまんらうの麩

みくつれば也**紫の一本** 天和 二年 聖天町をよみまんらうを商の根本は鶴屋といふ菓子屋

根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋

根元は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋

根元は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋

根元は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋

根元は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋

根元は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋

根元は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋を商の根本は鶴屋といふ菓子屋

江戸鹿子

貞享四年
羊印本

「米饅頭屋浅草金龍山あり」とや「同所鶴屋」とあり

江戸咄

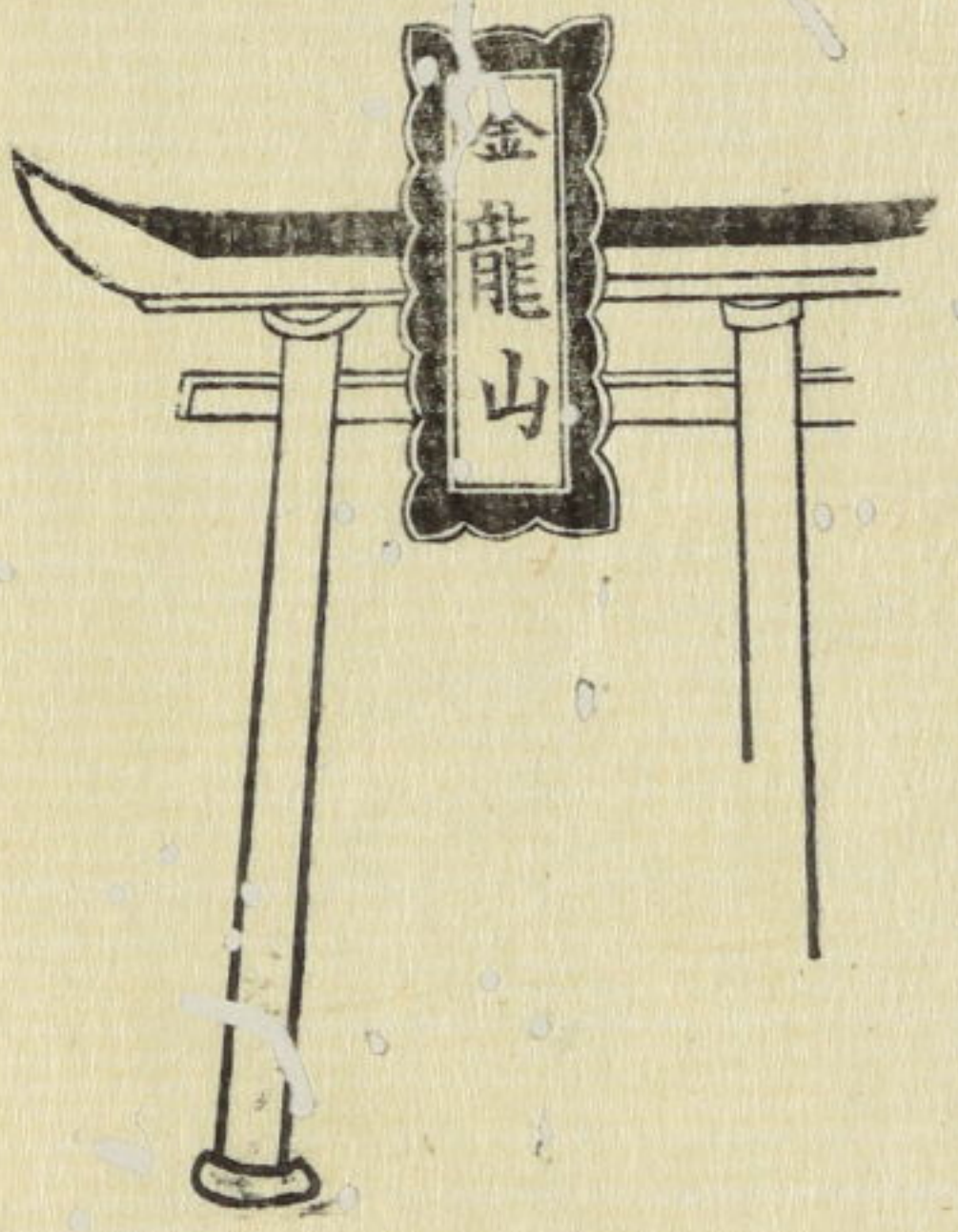
先板川故郷故江戸咄と題せ
後増補元禄七年の本あり

巻之五「真土山云々」の山の林鹿の「よきまんぢう」

江戸中より「よきまんぢう」とうたひたり云々
「当時よきまんぢうの歌あり」

享保の比の板江戸八景の繪本に金龍山聖天は二王門ありて
いづれなりと云ふまじき所ありて近きよきまんぢうあり

延宝六年板菱川の繪本に此辻賣の畷あり



江戸鹿子

真土山の参り坂の
登口又聖天町の門前
由左右ともに茶屋あり
此林鹿屋伊勢屋の
饅頭の名物ありとて
よきまんぢうと云ふ
とわれが
伊勢屋と
よきまんぢ
あり

名物

米饅頭

金龍山

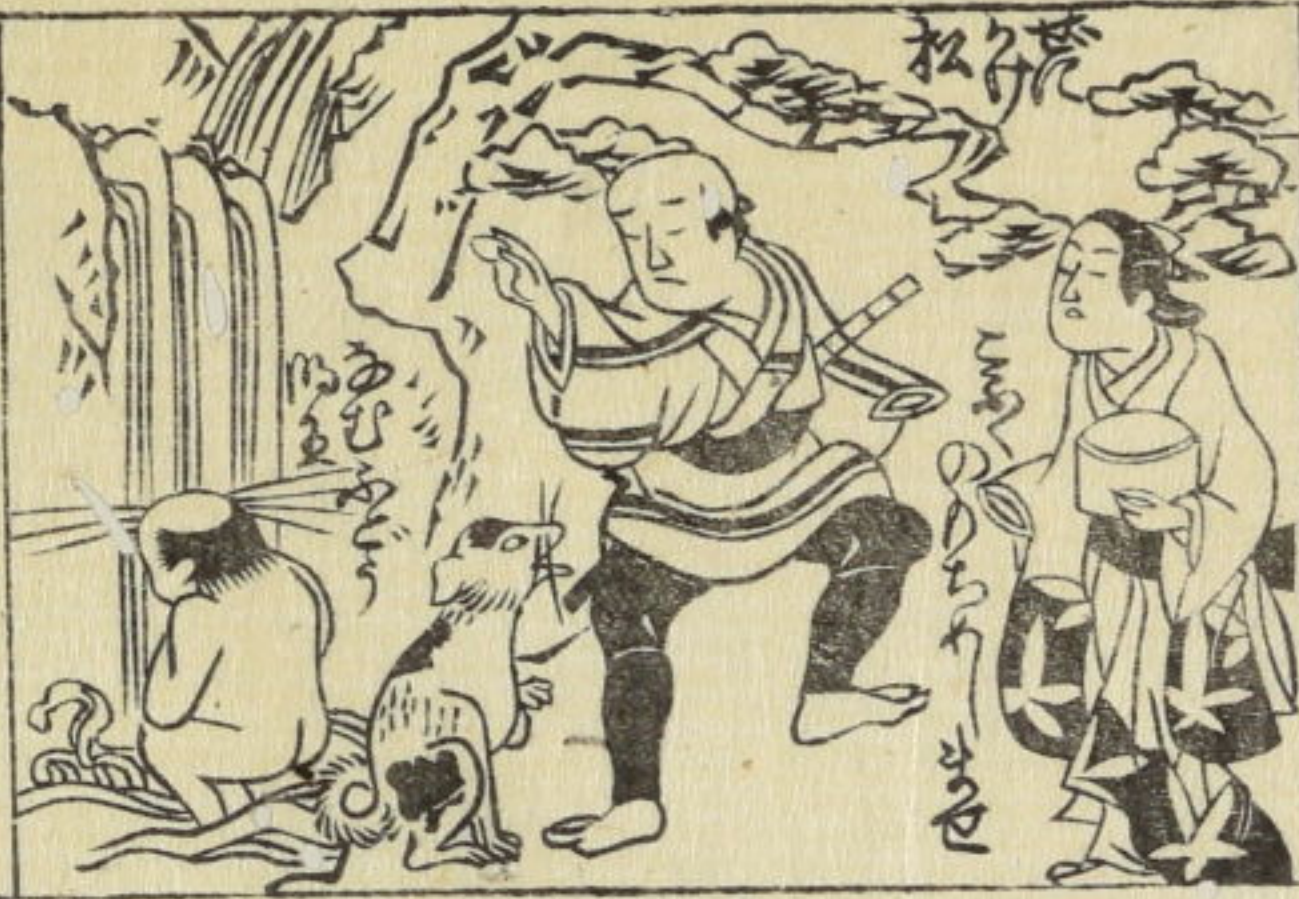
ぬきこや仁衛

此の昔よきまんぢうをいふは袋あり
布より貞享板江戸鹿子よ
きまんぢうと云ふべし

られ古に屏風の下張より出たま
書風のつらつらありやあり
よきまんぢうの業のしるし
あり

享保年中印本
江戸名所百人
一首之繪

月々るふやう



かゝるのなるに
みちのれあはれ
これあかひ

○目黒の餅花

十九

青目黒不動尊の門前... 餅花... 目黒の不動尊の境内は大なるありしなり

江戸八百韵 延宝六年板

附 目黒の原の大がとびはく

青雲 来雪

延宝の時... 目黒の原... 餅花の物語

○耳の垢取

二十

江戸鹿子 貞享四 耳垢取。神田紺屋町三十目長宣とありぬるが比京もあり

京利二重 貞享二 耳垢取。唐人越九兵衛とより 初音草 漸大鑑 元年板 巻之

五よ京と江戸ゆたるとどどある通町の通りとをうればあはれい歯ぬれ耳の療治

云く老人養草 正徳六 云近東京師の通りと耳垢取とを紅毛人の如くも似て

云くとのれがえ緑の未正徳の比とをもありあらん

五元集拾遺

観音で耳をあらせむとむらさき

其角

此もも耳垢取のころとをいふるあるべ

一代男後日

刻板の年号あり按西鶴が廿五年の

二毛巻よ云松浦浮平戸といふ所

とどらある草の屋をわけて云く髪を熱あをばあうと長崎一官と名を

はた都ぐらとる耳の療治人の似と云くて京の一官類と云くは

よ一官との耳の垢取ありあらん

耳垢取古藪

亡友大朝此畫を
模して予よあそぶ
接ふられえ縁多ふ
の繪あるべし



うたんとおがごと
あらりあり



骨董上編 上六

英氏画講よも
車垢取の番
あれらの草画を
模細くしてあそぶ
此番上果さるるべし



○ 臘脂繪賣 三十一

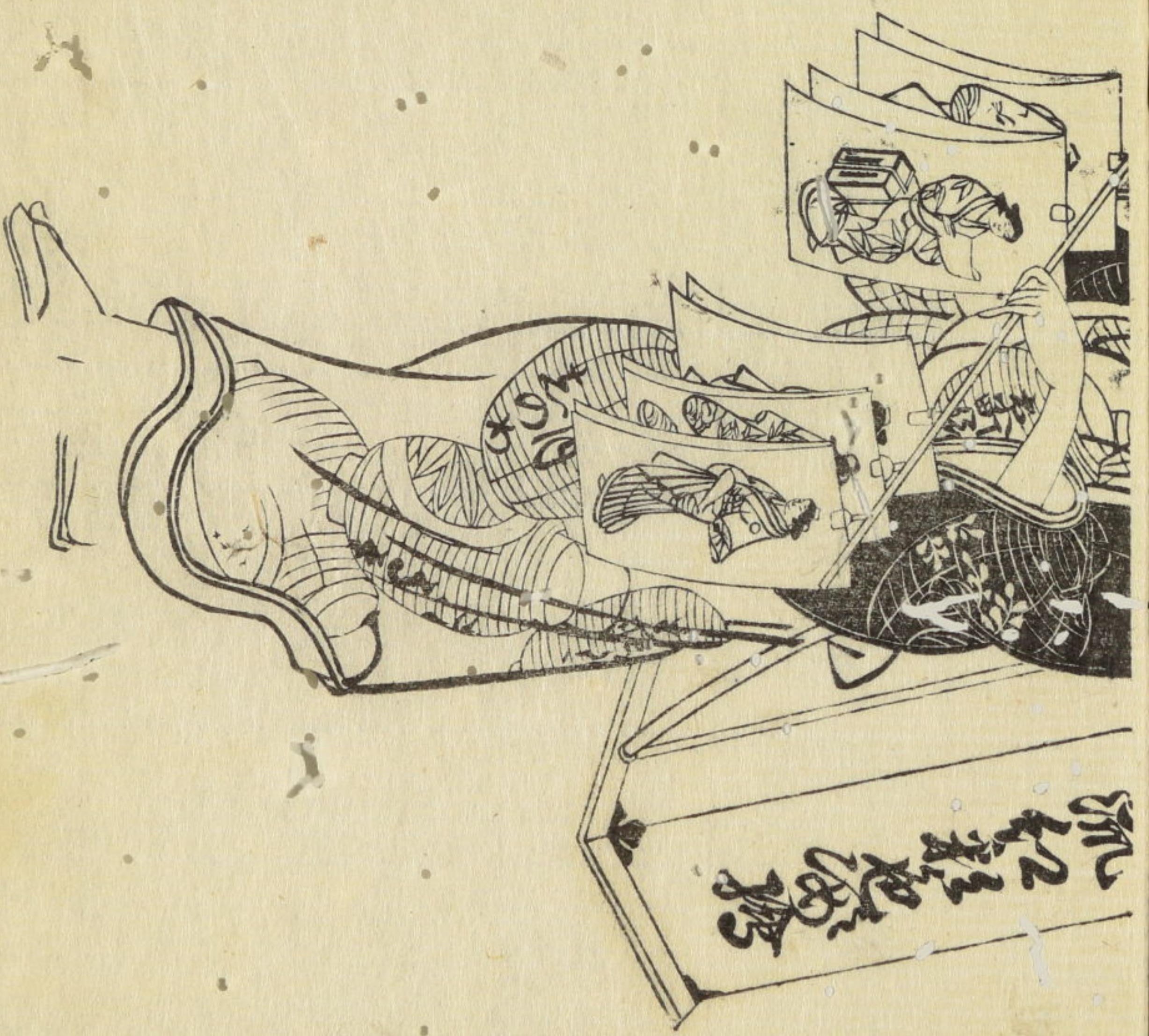
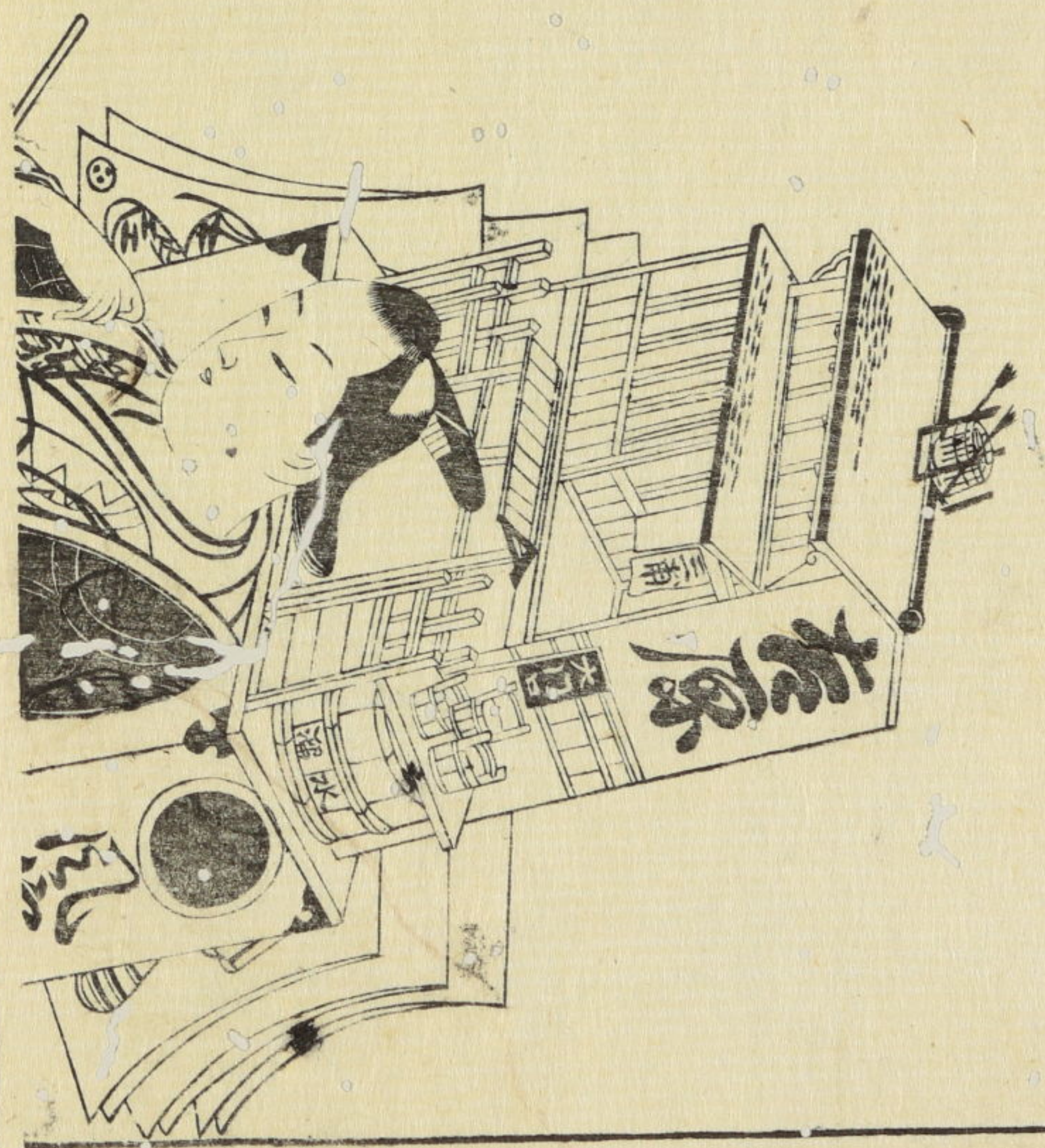
按よ板行の一枚繪ハ延宝天和の比始れる牧朝比奈と鬼の首引土佐淨瑠璃の繪
龍の嫁入の繪の類ハ芝居の繪ハ坊主小兵衛を多めけるもど其始あるべし當時ハ
丹緑青あどめくまぐらよ彩色ハたり菱川師宣古山師重等それを画り元禄
のころめより丹黄汁み彩色とそれを丹繪といひ元禄のころより鳥居
清信其子清倍等それを画り宝永正徳小至て近藤清春出たり紅繪と云ハ享保
のころめ創意のあり墨膠を引て光澤を出したるゆゑよ漆繪ともいふ
奥村政信のころそれをえぐるもよ 近代世事談
享保十 九 年 板 云 浅草御門同朋町竹某といふ
者板行の浮世繪後者繪を紅彩色とて享保のころめ比よりそれを賣幼童の戯びと
して赤師大坂諸國よりこれを又江戸一め並とありて江戸繪といふとあれはた摸
出より享保の比の紅繪賣の音あるべし
板行の一枚 唱のころより延宝天和と決まらん今文化十年よ
りこのおと百十年餘年を経たりゆゑたをまらるべし

○ 釜磨并猫の蚤取 三十二

新編上編上七

西鶴織留 三之巻云云とだ一年の師きよ空電の上塗を仕よするを手よりひよん
事と思ひよ又その暮め込達者ある男がなみかたにありきよなる大釜五丈其外ハ
大小にやらせ三丈げゆえく手前よ人をいぬ者の務まよ云云又五十なる男
風呂敷をうらむて猫の蚤を取まよと声立てよりける隠居がその手白三毛を
うらむゆりて人とれと頼まれたるよ一疋三丈げよ極め名譽よ取けるもつ猫湯を
あて洗ひぬれ身を其ま狼の皮よほみてあつ抱けるうらよ蚤ふもぬれたる
野をうたぐらよま狼の皮ようらりけるを大道へあひ捨ける是程の事よもその
も何より分列仕出 身よこの種とありぬ云云
右の織留ハ西鶴の遺稿を正徳二年刻せるあり門人團水の序よ羊書遺とて
その西の葉月よ此きをまぬとらる元禄六年ハ右の書中ハ元禄二年とある時をあらん
四年のひき 七羊板の序よ云大坂の西鶴が咄よらひよの風呂敷つとせせめあつにゆきて猫の
蚤とらつとひて口過する者ありと語られ云云
りつはとせせめあらん

べにまのづ
 臘脂繪賣圖
 五右衛門
 五右衛門の
 一掛摺の
 極行繪る



二
 噺雲奇截

○おがしりしんぼ 三十三

御伽婢子の天倪の略制あり小兒のわらわら置邪祟をあはせり形代あり雍列府志
天和二土産門小云白絹を以て人形を造り内は糟糠を充外白粉を施し是を御伽母子と
し此偶人元大小母子の形を造る始母子人形と稱し今人形の字を畧し之を糸書人老
今うまおまが母子を造りて引ひひとて通音あればわらわらあるべし人老
老て小兒の如くありたるを二度おがしり女子の幼氣あるをわらわら娘といふ漢文の
といひたゞひひとて幼をわらわらといはれ右の御人形より出たるをわらわら御婢子をばめたる
てわらわらとありたるをわらわら清くわらわらあり合類節用恍惚子の三字よりわ
るごとく割と字書を造るは恍惚の字義の今りありわらわら義のわらわら幼のわらわら
雅當言よとありたるをわらわらとありひひとてわらわらにわらわらあり

○駒形の螢 三十四

江戸雀 延宝五 年卯木 十之巻浅草駒形堂の雀の堂は二間四面南向あり云々信

かを催と人の此川よりを取て浅草へ参ることに解つたうと出船入船のあり
さのいき浦のゆ帆とやアさん九夏三伏のあつた此の風を舟に吹わらわらとびり
螢水よりほり勝景ゆかりありてあり繪をえりて堂のわらわらに樹木あり
殊をとり又江戸名所記 寛文二 年卯木 駒形堂の雀をえりて木立保ありて螢のわらわら

唐尾琴 元禄十四年板

此碑は江を哀すぬ螢の 其角
中にも眼前の体あり今いふるを人成立つて螢は化して草だよりわらわら百余年を
経て繁花の地となりぬ元禄六年駒形は殺生林断の碑立今も存せり右の句意を考ふるよ
裏江頭杜子美が七言古詩の題は哀江の字義をとり此碑立て此川のわらわらありてとありと

○浮世袋 三十五

或人古老の説ありとて語て云幼女子針業をあらは始し浮世袋とりの物をとらわら
縫て玩物とて緒を三角は縫綿を入れて袋めりて上の角は糸をはくる何の用
あら物あれども唯針業をあらはあり昔は花女はなわらわらを浮世袋といひて
あそびの家の前は柳を二本植て横手を結暖帯を掛られあそびの石をぬき其やよ

初の袋めく物をさぶらうら縫てほるありされと浮世袋といひあらりたるありと
 五人娘 貞享三 卷之一 浮世笠といひあり 一代女 貞享三 浮世笠 卯子酒 序 宝永 六年 浮世巾著る
 又巻之三 浮世笠といひあり 類あらん粟嶋といひの踊歌のくよをれ針くを懐き世袋
 の名目ええたをあるド 雛形とあらりあり今粟嶋の神よ手向る三角の袋めく物則浮世袋あるとを
 知りぬられいをゆる謳歌の説をとるある考と我あからせし粟嶋の神を女神と
 誘るより童女針葉又達と願をうけ浮世袋を手向るるあらん

○初雪の句 三十六

初雪や犬の足跡梅の花と云わ何人のひひうなるま 童もららむとむむ之 五元集
 鶏合 鶏去画竹葉是の五山流の僧雪の聯句よ犬走生梅花とる對あり云
 右の聯句よめとつて飲或の暗合したる也

○燈籠踊の古番 三十七



延宝 二年の書
 都歳時記よ
 此の
 景

延宝二年の
 今文化十年より
 百二十九年の
 あり

都歳時記

序より延宝二年とあり

卷之四よ云長谷岩藏花丸より六字の念仏よりを符さぬの

花をさぐり巧をほしたる四角ある灯笼籠を戴てをぐるぐれも肝よりのたると

まゝめて口歌あつる都ももたらざらざらありし此所より氏神の前より踊りぬ其年

みちりたる亡者ある家より行て夜更すをどぞとのありのりむるを例年す

りうりたるふあれば由来ありしものあらざれどたりし知者ありしや云

目次紀事よ云洛地岩倉花園両村少年の女子各大灯籠を戴八幡の社前より聚

て男子大鼓を撃手笛を吹踊を勤む是を灯笼踊といふ所戴頭上の灯笼踊る

女子の家より春初よりこれを造り互に其作る所の模様を秘伝原書漢文右よ

漢くあらゆると其古書あり

骨董集上編上之巻終



醒齋京傳先生遺稿

骨董集三編 上帙二冊 下帙二冊 全四卷

京山人百樹翁刪定

骨董集四板嘗本舖へ購へ得るを以て醒齋先生

の遺稿を京山翁よむ右二編の梓行近は存と寺

故は茲よ告て新刻の構筆を弘と云ハ

天保七年丙申初夏

江戸書肆 小徳馬 町三丁目 文溪堂丁子屋平共衛

